日本文学は世界文学たりうるか？

イルメラ 日地谷 キルシュネライト (Freie Universität Berlin)
Irmela HIJIYA-KIRSCHNEREIT

この講演のタイトルは、一見ナイーブに、あるいは又挑発的に響くかも知れません。一体何故、そんな問が可能なのか。日本文学が同時に世界文学である事は、まったく解り切った事実ではないだろうか。いや、ちょっとお待ちください。事はそう簡単ではないようです。ある日本の文芸雑誌の、今年の２月特集号“世界の吉本ばなな”を例にしてみましょう。ここには日本が含まれていません。世界とは、日本の外を意味しているようです。日本の出版社の多くのシリーズにおいてもそれは同じで、“世界文学体系”“世界の文学”“世界文学全集”“現代の世界文学”“新しい世界の文学”等のシリーズにおいても、基本的に日本文学は除外されています。“世界文学”と言う表現は、多くの場合“世界における文学”と同じ意味で使用されています。そのような場合、自動的に日本文学は除かれるようです。何故なら、“世界”とは常に“他”を意味しているからでしょう。

どうも“世界文学”との表現は、それとはいささか意味を異にしていると思われますが、しかしその問題と取り組む前に、それでは一体“日本文学”とは何かとの問に答えてみたいと思います。ここでも又皆様は、そんなのは解り切った事だと思われるかも知れませんが、私にはどうもあまりはっきりしないのです。もし私達が、“日本文学”とは日本語による文学だと定義した場合には、漢文や漢詩、アイヌの叙事詩や琉球の民謡等も日本語として数えなければなりません。そこで、“日本文学”とは日本人による文学であるとします。すると日本語で書き発表している韓国人や、例えばイアン・英雄・レビ等を無視する事になります。自らの作品で度々日本を扱っているカズオ・イシグロの文学は、はたして日本のあるいは英国の文学なのでしょうか。加えて、外国語で発表した日本人の作家はどうなのか。すでに森鷗外によるドイツ語のテキストが存在し、又あまり知られていませんが、北尾二郎と言う明治時代の物理学と数学専門の東京帝大教授がおり、彼は22巻、5500ページに及ぶ約1000のイラスト付の超大作をドイツ語で残しています。現在から例を取りますが、芥川賞作家である多和田葉子のドイツ語で書かれた作品は、はたしてドイツ文学なのか日本文学なのか？ご覧の様に、“日本文学”と言う表現の定義は、初めに思った程簡単でも明白でもないようです。それを言語、作家の国籍、又は作品のテーマだけに合わせると言う訳にはいかないようです。しかも現在では、日本文学は日本だけを対象としている訳ではなく、いわゆる“日本的感覚”などと言うものだけに拘束されてはいられないようになって来ていると思われます。例えば安部公房の作品は、必ずしも特定の文化に属しているようには感じられず、ドイツ語に訳された村上春樹の作品は、まるでアメリカの文学であるかの様に読むことが出来ます。また逆に、ヘルマン・ヘッセやリチャード・ブローティガンを、ずいぶん日本的だと思われる方々もいらっしゃることでしょう。

もし日本文学をさえ明確に定義できないとすれば、“世界文学”とは一体何なのか？つい最近、

社会言語学者の田中克彦氏が、自らの著作“言葉のエコロジー”の中で指摘していたように、この“世界文学”と言う用語は日本の辞典等ではほとんど見つけることができず、私自身も同じ経験をしてきました。しかしこの“世界文学”という用語の起源は、一般的によく知られているようです。それはゲーテによって造り出され、1827年、彼がアレキサンダー・フォン・フンボルトのパナマ運河の計画の虜になっていた時期であると記録されています。80才にならんとしていたゲーテは、スエズ運河やライン川とドナウ川の連結（これは今から何年か前についに実現されました）を新しい技術の成果として期待し、それを通して交易、知識と思想の交換を非常に具体的に望み、“世界文学”と言う着想をもって、世界的規模での人的資源の交流を夢みていたのです。ゲーテは次の様に言っています。“一国に限られた文学の時代は過ぎ、世界文学の時代がやって来た今、この時代を前進させる為にそれぞれが努力せねばならない。”と。“世界文学”と言うアイデアでゲーテは、口述または文字により伝承された、全ての人々、全ての言語、全ての国々の、高級な文学だけではない、全ての知的財産を指し示しているのです。彼は度々、全人類が互いに知り合う必要性を説き、おもしろい事にゲーテは、その際好んで商業や金融の表現を用いています。彼は“精神的な自由貿易”を要求し、そこにおいては当然、翻訳が特に重要な意味を持つのです。現実的であったゲーテは、お互いに知り合い、生き生きとした相関関係を通して影響を与え合う筈の文学者や民衆が、必ずしも常に、互いを修正したり好意を感じたり出来る機会を利用するとの幻想は持たず、少なくとも、相手に対する寛容さだけは学ぶべきであるとしています。

これが19世紀初頭におけるゲーテの考えですが、際限無きコミュニケーションの時代とも形容すべき現在はどうでしょうか。もし自らの圏外で認識される、あるいは世界文学として受容されたい場合には、今だに文学は仲介に、つまり他言語への翻訳に頼らざるを得ません。御存知のように、ここ何年か、日本文学が他言語に翻訳される機会は、日本が経済的に国際的地位を強める傾向と平行して増大してきました。これは一般的な、国際的に認める事の出来る傾向ですが、しかしそれぞれの国は、その受容を規定するところの自らの条件を持っている事と思われます。例えばドイツでは、1930年代と40年代に日本文学の翻訳活動の最初のピークを迎えましたが、その後70年代からその数が急上昇し、詩歌、青少年文学、哲学や学問的な書籍を抜きにした近代の日本文学のドイツ語への翻訳は、現在約1000点に上っています。何回も訳された作品もあり、それらも加えた数は約1500点に上り、散文作品に限って言えば、その半数は80年代以降に訳された物です。ここで1977年のユネスコの統計を基盤にしますが、旧東ドイツ、オーストリア、スイスの出版社を抜きにして、旧西ドイツの外国語からの翻訳数は約6600で、旧ソ連の7000に次いで２位に当たり、それを思えば日本文学のドイツにおけるシェアーは大きくありません。日本における翻訳数はオランダとイタリアにはさまれた６位です。その後ドイツで出版される新刊書の数、又その中に占める翻訳の数も増加していますので、翻訳数はそれよりもずっと多くなっているものと思われます。もちろんそれぞれの翻訳活動は、ゲーテが望んだ様にバランスのとれたものではなく一方通行的であり、例えば1992年、ドイツの出版社は2750の翻訳権を与えましたが、10500の他言語のライセンスを買い取り、その３分の２は英語圏からのものです。恐らく日本においても同じ様な状態なのではないかと私は想像していますが、この英語の圧倒的な強さについては後に又触れるつもりです。

ヨーロッパの言語間における日本の位置を知る為に、続けて統計を見てみることにしましょう。

これは1992年の統計ですが、一年間に10冊以上ドイツ語に翻訳された24の言語の内、日本語はその中位を占め、ポーランド語とポルトガル語にはさまれた12位に位置しており、純文学に限定した場合、ポーランド語の次、チェコ語の前となり、全体では9位に当たります。しかしこれ等の数字は、部分的な情報しか与えてくれません。新しく出版される書物が、普通それがドイツ語であれ翻訳であれ、大体同じ様な売り上げ成績を上げるとの統計を下敷きとすれば、そこでより重要なのは、日本の文学がそれぞれの国の文化生活や社会的な議論において、何かの役割を果たし得るかに注意を向ける事だと思われます。その意味でここ20年程を見てみますと、日本文学の書評が以前とは比較にならない程増え、メディアや催し物などで紹介されるようになったと認める事が出来ます。もちろんそこで重要なのは、それがいかになされているかで、時間の関係もあり、ここで詳しく御説明する事は出来ませんが、少なくとも私自身が行ってきた観察だけでもお話したいと思います。日本文学は80年代に入ってから、より幅広く紹介されるようになっただけでなく、それに対する批評もずっと質の高いきめ細かなものになって来ています。日本文学とは、特に注意深く思いやりをもって扱うべき、まったく異なった未知な物であるとの、結局は対象をあまり真面目に取らなかった以前の態度がはっきりと変化してきています。最近では、日本とその文学についての知識も増え、その結果、読んだ作品を、文学としてより正当に評価出来るようになったと言えるでしょう。それは同時に、極端な思いやりと無知から、責任逃れ的な結論でごまかしていた態度を捨て、対象をより批判的に扱えるようになった事をも意味します。60年代とは比較にならない程多彩な文学が知られるようになったという状況こそ、日本文学が以分の様にエキゾチックな片隅に追いやられてしまわない為の条件だったのです。そして中上健次、大庭みな子、古井由吉、野坂昭如、あるいは詩人の伊藤比呂美や谷川俊太郎等のドイツ語訳を推進したのは、積極的な翻訳者や好奇心の旺盛な出版社の編集者達だったのです。もちろん、この受け入れ側からの積極性こそ最も必要なもので、彼等こそ、それぞれの文学者に対する自らの興味を育てることが出来るからです。そしてその様な興味は、それぞれの国や読者層によってまったく異なっています。

日本文学は実際に重要と見られているか、又本当に世界文学として認識されているかを計るもう一つの方法は、例えばそれぞれの国において、青少年の文学教育の為の教科書に取り入れられているかどうか見てみることです。この例としては、残念ながらドイツしか上げられませんが、私は以前、ドイツの中学と高校の教科書にどのくらい日本のテキストが利用されているか調べてみましたが、時間の関係で、ここでも結果だけをお知らせしたいと思います。60年代以降、ドイツの教科書には20から25の日本の文学が載さられており、これ等の教科書が、基本的にはレイアウトや写真等の変更以外変わっていない事からも、この数字は現在使われている教科書の80パーセント以上からのものと見て良いかと思います。特に好まれているのは俳句や詩などですが、三枝和子の終戦を扱った作品“その日の夏”の抜粋も中学校の教科書に載せられています。日本文学が占める割合は、アメリカ、イギリス、フランス、ロシア文学等と比べ少ないとは言え、教科書内の確実なレパートリーとなっており、その意味で、日本文学の、世界文学の当然の構成要素としての認められ方の証明でもあります。

しかし、自らの社会で日本文学を仲介しようと努力している者にとって、非常に憂慮すべき問題があります。その一つは、既に述べたところの英米語のヘゲモニーですが、もちろん私たちは、

その背景にある理由を想像することが出来ますし、それを嘆いたり、何とかしようと試みるのは非現実的であり、理性的行為だとも言えません。しかし憂慮すべきなのは、日本の公式な機関やエージェントだけでなく、作家達さえもが、まるでこの状況を支援し拡大しようとしているかのようだとの事実です。この事実は日本ではあまり知られていないようですが、世界文学としての日本文学を害するだけで、有益であるとは私には思えません。そこから最大の利益を期待出来る為、エージェントが主に英語圏の出版社に売り込もうと努力するのはまだ理解出来ます。しかし私が聞いた限りでは、潜在読者層の数が最も大きいにもかかわらず、英語に訳された日本文学の平均売り上げ数は、必ずしもフランス、ドイツ、イタリア語による売り上げより多いとは言えないのです。そして現在日本には翻訳推進の為の特別なプログラムが存在するにもかかわらず、英語圏以外の出版社は、今もってその援助を受けるのが非常に難しいとの事です。日本のスポンサーは、出来るだけ英語への翻訳の援助をしたがるとも聞きます。それだけでなく、日本の文学者には、自らの作品の英語への翻訳権がまだ無いからと、他の言語への翻訳を許可しない者さえあるのです。つい最近、有名な日本の作家の、1993年に日本で出版された小説のドイツ語への翻訳の際それがありました。又他の高名な作家は、ドイツの出版社が自ら選択し提示した彼の短編集を拒否したのです。彼は、やがて彼のアメリカのエージェントが英語圏の為に他の作品を組み合わせドイツ側に提供してくるまで、長い間作品の権利を渡す事を拒否し続けました。しかしその選択された短編にドイツ側は興味が無く、彼の短編集はドイツ語では出版されなくなったのです。

日本の文学者のこの様な政策は、日本の公式機関等における、英語以外の言語への日本文学の翻訳は全て英語からの重訳であるので、英語版だけ注目していれば良いとの意見を助ける事になるのです。そのような意見は事実に反しているだけでなく、オリジナルからの翻訳をきまりとしている翻訳者や出版社を侮辱する事にもなります。日本文学が、英語に訳される前に他の言語で発表された例は多数あります。例えば河野多恵子は80年代にまずドイツで出版され、その後フランス、オランダと続きましたが、英語圏ではまだ一冊の本も出ていず、昨年ドイツで出版された河野の２冊目の本が、今アメリカで最初の本として準備されていると聞きました。又吉本ばななはまずイタリア語で出版され、英語版はスペイン語とドイツ語の後に出されたのです。しかし三島由紀夫のような日本の作家が、彼のフランスとドイツの出版社に、日本語からでなく英語から訳されるよう指示する時、それは不幸でまったく意味の無い、英語のヘゲモニーの悲しむべき例となるのです。ドイツの出版社は、この三島の指示を奥付けに書き入れた為、読者は、出版社の責任ではまったくない、このアマチュア的とも言うべき措置を経験出来るのです。

世界文学とは、全てを英語圏の読者の好みに合わせてしまう事を意味してはおらず、又幸運にも事は必ずしもそのようには機能しないようです。すでに述べました様に、それぞれの国、それぞれの言語は非常に異なった反応を示し、そんな訳で、ドイツの読者の好みは、オランダ人、フランス人、デンマーク人の好みとも大きく異なっています。それぞれの文学的な風景を豊かにする為にも、全ての国が、英語のフィルター無しに日本のテキストを受け入れる権利を持つべきです。しかし、ここにもう一つ非常に残念な問題が存在しており、多くの日本の文化責任者たちは、オーソドックスで型にはまった外国における日本像を好んで見たがるようです。その意味からも、野坂昭如や深沢七郎よりも、川端や三島の翻訳を奨励したいようで、吉本ばななや村上春樹は、害の無い極楽鳥として黙認されているのかもしれませんが、日本の近代文学の古典とも言うべき、

島崎藤村の“破壊”が外国で読まれる事はあまり見たくないようです。この様な公的サイドの偏狭さは、むしろ日本文学の評判を害する事になるでしょう。何故なら、世界文学として認識されるのは、自らの多彩で豊かな文学の全てを、英語圏だけでなく、全世界に提供する事により可能となると思えるからです。

“世界文学”との観念は、例えばアメリカの好みを指向した映画産業のような、文学の思いのままの商業化と戦う事を意味します。もし私たちが文学から、自らの性格を持たない味を薄められたワールド・フィクションなどでなく、個性的な多彩さを求めるのなら、いわゆる国際的なスタンダードへの安易な順応の危険性を認識しなければなりません。日本文学は、公式の美化されたものだけでなく、自らの個性をあらゆる側面にわたって提供する時初めて、世界文学として存在する事が可能となるでしょう。そしてそこでは、日本文学の受容が各言語において、それぞれまったく異なっている事を覚悟すべきだと思います。